

BRITISH CAKE HOUSE マンスリー英国菓子

(コラム)イギリスの旅をご一緒に楽しみましょう ～お菓子と紅茶をお召し上がりいただきながら～

イギリスはとても遠い国ですが、島国である事、王室なども含めた様々な伝統など日本に似ている形式があったり、スポーツや文学、音楽などのカルチャーを通じて、何となく親近感のある国。

また物語や映画、ドラマなどで目に映るシーンもアメリカと同じくらい日本では馴染みがあり、一度は訪れたい国で、実際に多くの方々も渡英されたご経験があるかも知れません。

だからこそイギリス好きも多くいらっしやり、確かに楽しい国。

ところがこの国、同じようできてまるで異なる国民性。また独特の価値観、そしてライフスタイルから生き方まで、想像と異なる事も多くあると思います。

もちろん日本人だって様々な考えや生き方がそれぞれ異なる訳ですが、そういう意味でなく、もっと大きな枠でしかももっと繊細に見て行くと違う事。

見慣れたものや安心感のある共通点をどうしてもイギリスに当てはめてしまいそうですが、折角このコラムをお読み頂いたからには、出会える素敵なものを探して行こうではありませんか。

実はそれがイギリスを知ったり、旅をする時のとっても面白く、旅をする理由になる気がします。

インターネットや本で覚える雑学やもの知りの枠を超えて、もっと美しく、もっと感動し、もっと学べるものが、この国にはあると思います。その領域のお話を、お届けしたお菓子と紅茶でもお召し上がり頂きながら、ご一緒に語り合おうではありませんか。

イギリスの旅を大きく別けると、ロンドンの様な都市と、カントリーサイドを旅するという2つのテーマに分かれます。

日本でも都市と田舎は異なりますが、イギリスはまるで異なる国ほどの違いがあります。日本の場合は成功者は都会に集まりますが、イギリスはカントリーサイドに出て行きます。これはイギリスを旅する時の大きなテーマにするべき題材です。

つまりイギリス文化を見てゆく上で、とても大切なポイントになるのです。

もちろんロンドンも素敵な場所で、カルチャーや政治・経済の中心である事は間違いありません。ロンドンは別の機会に触れて参りますが、もしあなたがイギリスらしいイギリス、豊かな英国、美しいイギリス、そして世界に唯一の国イギリスに出会いたいと願うのであれば、ぜひカントリーサイドに旅に出しましょう。

イギリス人の心に寄り添う場所。それはロンドンの家のバックヤード(裏庭)やタウンハウスの様な共同住宅には専用のスクエア(共用庭園)がある事がより良い居住環境の条件となります。現在はパブリック化された場所も多く存在しますが、この緑地をロンドンでは目にする機会があると思います。

またロンドンにはハイドパークなどの広大な公園がいくつもあり、湖や馬場やウォーキ

ングロードまであり木々に囲まれ森が都会の中に存在するかと思う程。そしてロンドンから電車や車で少し郊外へ移動しただけで突如羊が居る緑地となり、「ロンドンは小さいな」と思われるかもしれませんが、これはグリーンベルトとして政府の自治的な区画整理によるもので、居住地と緑を区画する事で、様々な都市問題を解決する思案を実施しているのです。ロンドンだけでもこの地帯はロンドンの面積の3倍に及びます。またこの成功例はイングランド各地の地方都市でも取り入れられているのです。

これにより理想的な人間が生きるために必要な心の領域が定められたことで、かなりの防犯や治安維持、精神の安定に繋がったとされています。

しかしこの点もイギリスを探る上では大切な要素で、なぜそうした考え方に至ったのか、を見て行くと、産業革命を含め世界の先進国として、また労働者や移民の課題を超えた「人の生活」を考えるヒントになると思います。

そしてもう一つこれも大切なポイントですが、現実的にイギリスではこの政策が可能な地形を有していた事も考えるべきで、日本で同じ事をしようとしても国土の殆どが森林で生活しやすい居住地が地形的に日本では無理だという事も事実です。

とするならば、日本の場合は大都市に人が集まり、仕方なくタワーマンションの様に上にと同じ土地面積の中で対策した結果であると言えるのかも知れません。

さてそんな中で人が生きて行く上で不可欠な物に食べ物がある訳ですが、これが上記と関係ない様で、とても深く係わる嗜好へと導きます。

私的な例え話で申し訳ないのですが、こんな経験を書きます。

私達も殆ど湯河原に居ますが、たまに都会に出向きます。大きなビルが競い合う様に建ち、僅かに太陽の光が入るかという場所に木が植えられ、道路には車、歩道には多くの人が行き交います。

騒音に溢れ、何だか不思議な匂いが漂い、空気まで色が付いているかの様。

でも経済活動やカルチャーが多く存在し、刺激を求めたくなりますし、確かに物質に溢れ豊かさの象徴であると感じます。ブランド品の一つも身にしたくなりますか。

信号も青になれば一斉スタート、電車も時刻通りにきっちり走ります。有難いです。

でも何だか、みんな、いつでも競っている様で。

何かひとつ間違えてもダメそうだし、人と違った価値のないものなんて、本当に価値がないのでしょうか。情報を見て聞いて、遅れず、振り落とされず…。

と、そんな環境の中で食べたくなるケーキを探していると、こんな私達で“さえ”「カッコいい」洗練された複雑なプティガトーが欲しくなるんです！

目を閉じると浮かんでくる、ビルの様に線を描いた図形の様で、色とりどりの人工的色彩りも、“いつも”は欲しくない香料フレーバーの匂いを想像して唾液が出て来るんです。これ、目にしているものに慣れちゃうんですね。

その上、カッコいいお店で、洗練されたインテリアで、「少し頑張ったんだから高いけどこれ買おう、そう自分へのご褒美として」なんて、50歳過ぎたおじさんも思うんです。

湯河原に居たら、ぜったい絶対ありえません…。これ催眠術ですか？(笑)

さてそんな体験談をどう思われるか、お恥ずかしい限りですが、今月のお菓子に話を つなげます。

ベイクウエルというのは実は地名です。

英国菓子にはこうした土地の名前が着いたお菓子が存在しています。変わった感覚です ね。日本だったら有名だったり、売れたお菓子は直ぐ誰かが真似し商売にしますが、流 石に土地の名前を書かれると真似しにくいですね。

しかしご存知かも知れませんが、ベイクウエルプディングは、このベイクウエルの中で、 「家が本家だ、いや家が元祖だ」と闘ったりして、どこでもある話ですね。

しかしながらどちらが本物か、はこのコラムでは語る必要はありません。しいて言うな ら「食べ比べて好きな方が、好きなお店。」という事でおっしゃって頂ければと。

それより実りのあるお話をして参ります。

ベイクウエルはイングランド中央部の北側にある小さな町です。

ピークディストリクトという英国内に数か所ある広大な国立公園の中にある町です。 コッツウォルズや湖水地方はよく行かれる方が居りますが、日本からピークディストリ クトに行って来たとはあまりお聞きしません。イギリスでは人気です。

そこには何があるの？と聞かれれば、お答えは何もありません。と特にランドマークが ある訳ではありませんが、美しい風景が続き、岩や滝、風景！などとても素晴らしい世 界が広がっております。ここをイギリス人は訪れて、何をするかという、ひたすら歩 きます。フットパスを歩いて、これが最高の癒し、贅沢なアクティビティーなのです。

そんな中で内緒の場所も多々ありますが、外せないのは「チャッツワース」という大邸 宅です。建物や個人コレクションなどももちろん素晴らしいのですが、何と言っても広 大な風景庭園は凄いです。庭園と言っても家から見える風景を全て庭にするというもの で、小川をせき止め湖にしたり、元々あった村をそっくり移動させたり、風景に溶け込 んで見える木々もぜんぶ計画デザインされた庭園です。

そこで圧倒され、そこからトコトコ歩いて行き疲れた頃に現れる村がベイクウエルであ ります。

さてその時、人は何をするでしょう？そうでお茶を飲みたくなります。もちろんお菓 子をお供に。

またその時何を食べたくになりますか？そうです甘いお菓子で少しお腹が満たされるも のが欲しくなります。

選んでしまいますね、そこで食べるとすればベイクウエルプディング、さらに持ち帰れ るベイクウエルタルトを。せっかくの観光ついでで、つい食べて買ってしまいます。 なので、どちらが先に有名になったか。お菓子なのか、この場にただお茶とお菓子を楽 しめる場所があっただけなのか。（この土地でなければ有名にならなかったかも）

実際に食べてみると美味しい誰にでも好まれる味。紅茶にもよく合いますし。

特に香りや風味やクセが特にある訳でもなく、純粹に美味しいお菓子の構成です。

しかしです、見た感じは、本当に素朴なお菓子そのもの。

先程の都会で出会う線で描いた様なケーキのデザイン性はゼロ。全部茶色い。タルトはフィリングの上に白と赤で日の丸の様な盛り付けもありますが…。お店も最近リフォームしましたが、何ともよくあるイギリスの安いティールーム仕様。

けれども、なんです！

どこにも気持ちは、みすぼらしさや虚しさや残念感がないのです。特別ではないけれど、普通に美味しくて、普通に食べられて、お腹も心も満たされる。都会の先程のケーキよりも、もっと充実感や満ち足りた幸福感が何故かあるのです。

この町から 10 マイル程離れたもう少し大きな町にバクストンとい場所があります。実はこのバクストン、イギリスではよく知られた地名なのです。それはイングランドの多くのスーパーなどで「バクストン」という発砲水がよく売られているのです。私は若い頃からこれが好きで、いつでも携帯して飲んでいました。

水自体に特別な味がある訳ではないのですが、車を運転しながら、「あ、そうか！」

と気付かされた事がありました。

この水と出会ったのはロンドン。でも何か澄んでいて、発砲力が強く、惹かれていました。ただ喉を潤したかっただけなはずでしたが、この水が生まれた風土気候、土や大地の味わいに何気なく惹かれていたのかも知れません。

同じようにあの場所のお菓子、ベイクウエルにはそんな味わいがあるのだろうか？そんな事は無いのだと思います。

ただ歩き疲れて辿り着く町。特別な材料や、奇抜な工夫、そして自然のまま焼きあがったそのお菓子の姿に、何気ない喜びをいつも以上に感じたのだと思いました。

英国菓子にはそんな日常にあるささやかな喜びが潜んでいるのではないのでしょうか。もちろんだからと言って、都会の洗練されたお菓子を否定してのではありません。先程書きましたチャッツワースを訪れた後ならよく分かります。

どんなカッコいい大きなビルも、人工的な遊園地も、あの建物や庭園を観た後だと闘う気さえなれません。そして風景に抱かれて感動しながら人間の感性を刺激されながら、歩き疲れた時、洗練された形や色、匂いのお菓子は、もはや不可欠なものでは無いようです。

さてこれがイギリスのカントリーサイドを旅した時に待っている現実です。

だからこそ人は、その偉大さや喜びに気付いた時、自分の生きる中に、そして近くにそれ感じていたいと都市計画や住環境を調べようとしたのでしょう。

だからいつか成功した時、それがもっと身近にあるカントリーサイドで生涯を過ごしたいと願ったのでしょう。

そしてそこで豊かさの象徴であるささやかな喜びの時間を求めて。

それがティータイムを大事にする、私も彼らから学んだ大事な事でした。

さあ、これから様々な旅先や風景に出会いましょう。
ささやかなお手元に届くお菓子をお召し上がりいただきながら。

2022年2月
小澤桂一



Map showing the position of Bakewell within the United Kingdom



Contains OS data © Crown copyright and database right 2021